

歌壇

吉川宏志選

入選

紫陽花を古新聞に載せたれば活字が逃ぐるやうに虫這ふ

△評▽ アジサイの花を新聞に包もうとしている場面だろう。花に付いていた黒い虫が出てきて、いかにも文字が動き出したように見えたのだ。「逃ぐるやうに」が面白く、臨場感がある。

遺影用義母の笑顔に夫着せるA-Iが選ぶ花柄ブラウス

△評▽ 現在は、その人に似合う服をA-Iで合成することができる。遺影でそんな操作をしている夫を、母への愛情のためだと思いつつも、やや複雑な感情で眺めているのだろう。

西京区 赤見坂千春

母かともルソンに戦死の父かとも蛍ゆらりと肩に纏える

△評▽ 蛍を死者の魂として見る発想は古くから存在するが、「ルソンに戦死の父」という背景が、歌に重みを与えている。歌のリズムに柔軟さがあり、下の句の描写も具体的に美しい。

福知山市 阪梨 義春

佳作

長き間に右の靴底擦り減らし家族に歩みを合わせし母よ
夕闇の迫る四階病窓の外に燕はまだ飛び続く

三十年夫の名前で来るハガキ住処は空にあるはずだけど
向かい風に時にはなりてひるがおの浜べへかえすきみの小舟を
その昔隠し田ありし河川敷今も下肥ほのかににほふ

老母、老母と短歌を詠んできたれども亡くなりて思ふ母は母なり
下の子のくしゃみに起きる上の子がタオルケットを分けてまた寝る
医療用ホチキス取れし跡見れば規則正しき虫食いめきて
じいちゃんの眼に光あり力あり八反分のキヌムスメ植えて

一瞬の光の後に雷鳴は滑りゆくこと夜空を駆ける

境界の隣の通路にびっしりと小紋のごとく十葉の白
側溝の蓋の穴がつづくなか媼の杖は坂を下りぬ

自転車から乗車きびしく規制され野良の仕事の編み笠までも
還暦から数へなほせば二十歳なり青葉若葉に風の声聴く
子の植えしトマトほんのり色付きてこの週末に来るを待ちおり
壊れないようにそうつと掴んだ手愛し合つとはゆるすことだと

宮津市 沼野 祐子

高島市 峯森あや子

南丹市 神社 啓子

天津市 萩原 愛

福知山市 阿辻 豊

左京区 藤野 晴子

右京区 袴田 朱夏

福知山市 樋口やよい

城陽市 望月 美穂

高島市 古川幸太郎

宇治市 林 菊代

大津市 土居志げ子

八幡市 図師藤次郎

亀岡市 井上 實

北区 鈴岡 徳子

長岡京市 蓼川 結太

京都 文芸